

特集 地域力は松前力

行政主導ではなく、住民主導のまちづくりのため、

「住民集会」と「作兵衛子供会議」の2つの取り組みを実施。

「自分たちの地域は自分たちでつくる」との思いで住民が立ち上がりました。



住民集会は、上の多様な主体がそれぞれの強みで足りないところを補う「協働」を行い、意見を取りまとめ、カタチに(事業化)する場として行われました。作兵衛子供会議は、中高生が義農作兵衛の心を受け継ぎ、町の未来に貢献できる事業案を行政などに提案。その後、住民集会と同様に、他の主体と協働して実現に向けて動きます。どちらの事業も住民主導で町を変えるため、事業案を検討しました。



住民集会

担い手不足…

コミュニティの希薄化

ごみ分別、防災意識が低い

エミフル以外の観光資源は?

住民が動き始めた。

夏前からスタートした、町内の住民や企業に勤める人、大学生などを対象に行われた「住民集会(全4回。42人参加)」と、町内の中学生と伊予高校・伊予農業高校の学生を対象に行われた「作兵衛子供会議(全6回。42人参加)」。

この2つの取り組みに携わったのは、それぞれ違う人たちです。しかし、どちらの取り組みでも、行政が主体ではなく、参加者自身が「町のため」にできることを考えました。

まず、最初に行ったのは、今の松前町を理解することです。作兵衛子供会議では、メインの講師に町ロゴマークを制作したデザイナーの山内敏行さん。

疑問に感じる人もいるかもしれませんが、移住者が増えたり、家族形態が変わってきたりと、昔に比べ多様な文化があふれる今の生活では、行政だけでは対応しきれない状況も多くなっています。多くの立場の人を巻き込み、町を変えていくことが求められているのです。

付箋に書かれたのは、交通、観光、自然環境など、さまざまな分野に関するものです。これらの意見は、企業と町民、違う学校の学生など、さまざまな立場の人の思いが集まることで幅広いものとなり、さらに意見を出し合うことで、新たな意見も生まれていきました。参加者が書いた付箋は、何百枚にものほりました。

では、その課題を改善してい



子供会議

- 1_ 各班で積極的な意見交換が進む(住民集会)
- 2_ 違う学校の学生が協働して、プレゼンテーションの資料をまとめていく(作兵衛子供会議)
- 3_ 各班で話したことを発表。他の班と共有していく(作兵衛子供会議)



海があって水が豊富。でも、中高生が楽しめる場所が少ない!

住民集会と子供会議で

Interview



住民集会講師
りそな総合研究所 リーナルビジネス部長
藤原 明さん

課題が多様化し、増大している現代では、行政主導ではうまくいきません。コミュニティの再構築が日本全国の悩みとなっています。住民が主導となり、現場の意見を集約し、多様な主体の強みを把握・共有して、声を大きくしていくことが、コミュニティを強くし、企業や行政を動かすきっかけとなります。



住民集会参加者
弓立 真子さん =徳丸=

集会の中で、私が「使わなくなった鯉のぼりや雛人形を使ったイベント」を提案したとき、企業の人に「いいね」と言ってもらえましたし、自分では気付かなかったアイデアを知ることができました。町民の人だけでなく、企業の人もいたので意見が偏らず、いろんな意見が出たのがよかったです。もっと意見が集まれば、もっといいものができると思います。



テーマ2 珍味・塩屋海岸

海をテーマに産業を活性化

「海を生業としてきた松前町の人は、海民の子である」作兵衛子供会議で、作家の早坂暁さんから話を聞いた学生たちが考えた、海がテーマの提案を紹介します。



提案は子供会議の
KKKグループ
(感動・決意・希望)

中高生向けの珍味を

子供会議

中高生向けの珍味の開発

この提案は「中高生向け」を対象をしぼったところが特徴です。大人のものというイメージが強い町の特産の珍味を、中高生も食べやすい値段にして、健康面も考えて提案しました。

値段が高くて量も少ないし、酒のつまみというイメージが強い珍味は、中高生からすると買いくらい…。そこで、せっかくの町の特産を中高生にも味わってもらうため、中高生向けの珍味の開発を提案します。

デザイン、商品開発はワークショップ形式で行い、「うまい・安い・食べやすい・健康促進」の中高生ブランドの珍味を開発。珍味はもちろん、町の知名度アップを目指します。

海と夕日のプロジェクト

提案のポイントは、写真コンテストです。入賞作品をパッケージにした珍味を、海岸でビアガーデンを行って販売。そうすることで大人も子どもも楽しみ、特産品のPRもできると思い提案しました。



提案は子供会議の
YKMKグループ
(夕日の[Y]綺麗な[K]松前に住む[M]海民[K])

この提案と組み合わせれば、さらに効果的に エミフル+αの観光資源の体験と紹介

住民集会

認知度が高い「エミフル」以外にも、町内にはたくさんの観光資源があるはずなのに、それが顕在化していません。住民の私たちもそれらを詳しく知らなかったり、知っている気付いていなかったりします。

そこで、さまざまな機関と協働を図り、文化資源・工業・珍味産業・スポーツを知ってもらうための勉強会を開催。工場見学など体験ルートとプランを計画するほか、観光ボランティアを作り、町の魅力を発信していくことを提案します。



提案は住民集会の **8人**
観光提案グループ
中川 豪さん (伊予銀行)

初めは、エミフル以外の観光資源を新しくつくりたいと検討していましたが、話し合っていくうちに、松前町にはすでにいいものがあることに気がきました。そこで、それを知ってもらえるよう見学や体験できる機会をつくることを提案しました。

海と夕日のプロジェクト

子供会議

松前町は小魚珍味が有名なのに、町民は海に興味がなく、海に行く目的がありません。そこで、海と夕日のPRと、海に行きたくなるような催しの開催を提案します。

まず、海と夕日の写真展を実施。入賞した作品をパッケージにして販売し、海岸で夕日を見ながらビアガーデンを開催します。その他、オプジーや簡易ベンチも作って、より多くの人に海と夕日に触れられるようにします。



住民の皆さんが考えた事業案をテーマに分けて紹介していきます。

これが私たちの提案です



テーマ1 防災・ごみ

もっと安心安全な生活を

主体的な防災意識の育み

住民集会

各地区の防災訓練が形式化、形骸化し、参加者も決まった人が多いため、「主体的な防災意識の育み」を目指します。

形式化・形骸化している訓練では、リアルな体験ができず、住民に危機意識が生まれません。そこで、ストーリーのある防災訓練を行えるよう企業、消防団やNPOと連携します。

また現状では、子どもの参加が少ないため、学校や児童館と連携を図りながら、ゲーム感覚の要素も盛り込みます。



提案は
住民集会の **6人**
防災提案グループ
麻生 英毅さん
=昌農内=

松前町は災害が少なく、みんな切羽詰まって防災を考えていません。「いかにできないか」を知ってもらう機会として、リアルな体験ができる防災訓練の実施をみんなで提案しました。

ごみ回収システムの多様化

住民集会

ごみの減少や資源化を図るため「ごみ回収システムの多様化と周知」を進めていくことを目指します。

ごみの減少や資源化を進めるためには、分別回収方法の周知や、「ごみステーション」の利便性が有効と考えます。そこで、広報まさきや企業と連携し、周知を図ります。

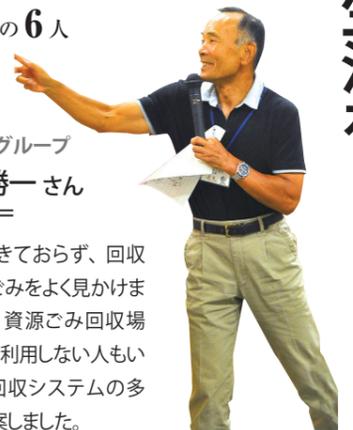
周知後は、各地区での資源回収の格差をなくすよう協働していくほか、ごみステーションを増やすよう行政や企業と話し合い、資源化を進めます。

松前町では…
家庭から出る可燃ごみの約 **2割**は資源化できるはずのプラ類

提案は
住民集会の **6人**

ごみ提案グループ
逸見 勝一さん
=上高柳=

分別できておらず、回収できないごみをよく見かけます。また、資源ごみ回収場所が遠く利用しない人もいるため、回収システムの多様化を提案しました。



メンバーは「より暮らしやすい町を目指し、楽しいこと、役立つことをしよう」との思いを持った50人ほどです。学習から実践へをテーマに、移住交流・子育て・福祉・特産品開発などのプロジェクトを進め、興味のあるものメンバーが参加しています。やってみなければ、うまくいかなかった事例もありません。でも、大切なことは、「とりあえずやってみる」ということ。規模が小さくてもやってみることで、取り組んだ事実ができて多くの人に知ってもらいきっかけになるし、何がダメだったか課題も見えてきます。



④漁師めし「よもくれ固子汁」を片手で食べられる串に改良した「よもくれ固子」を販売。ひじきをはじめ、地元でとれる食材を使っている ⑤月1回の定例会の様子



まちづくり学校双海人 用夢員
本多 正彦さん

まちづくり学校双海人

地域活性化を目指した学びと実践を行う住民団体。農家、主婦、商工会、学生、行政職員など多様な人々が話し合い、サロンの実施や商品開発などに取り組んでいる。

この提案を実行に移すのは、あなたです。

作兵衛子供会議で子どもたちの提案を聞いた後、義農味噌(株)の田中正志代表取締役は、このように話していました。

「麦味噌のPRが十分にできていないことが分かりました。実際に食べてみてほしいし、ぜひ工場の見学に来てほしい」

今回の提案を聞いて「そんなこと私たちが実現できるの?」と思う人がいるかもしれませんが、でも、思いを伝えることで、それに共感し、力を貸してくれようとする人がいるのです。

住民集會では、「高齢者の受身でないコミュニケーションしやすい環境づくりを行いたい」「地域の一体感を感じられる現代の祭り(行事)を創りたい」という提案もありました。

これは、多くの人がもっと地域のつながりを強めたいと感じている証拠です。この思いをより多くの人や企業で協働してカタチにしていくことで、町はより住みやすい、明るく楽しい場所になっていきます。

取り組みは始まったばかりです。行政も予算化を検討していきますが、一番大切なのは、皆さんの「町をこうしたい」という気持ちです。地域力で松前力を強めていきましょう。



住民集會のメンバー

テーマ3 義農作兵衛

義農作兵衛をテーマに
まちを明るく・楽しく

町の偉人、義農作兵衛に焦点を当て、もっとまちを明るく、楽しくするために考えられた提案を紹介します。



現在の義農祭は参加者の地区に偏りがあり、子どもも少ない

あまり知られていない「麦味噌」と、北伊予・岡田地区の参加が少ない「義農祭」。

そこで、義農祭で高校生が麦味噌づくしのブースを作るなど、麦味噌を広めます。また、開催時間を遅めたり、中高生の吹奏楽を取り入れるなど、舞台発表を毎回変えたりして、誰もが参加できる町の一大イベントとなる義農祭にします。

麦味噌の活性化



義農祭の活性化



形骸化が進み、若い世代の参加も少なくなった義農祭。そこで、行燈を利用して前夜祭を開催。さらに、若い世代の地産地消を促すため、特産の裸麦とイチゴを使ったタルトの商品開発を行って販売することで、義農祭、そして松前町の活性化を目指します。

麦味噌活性化プロジェクト

麦味噌は、家で食べたことがありませんでした。だから、義農祭で屋台の出店をするなどして、みんなで楽しみながら、特産の麦味噌を有名にするきっかけをつくりたいと思い提案しました。



提案は子供会議の
MIKIOグループ
(松中、伊予高、北中、伊予農、岡中の頭文字)



提案は子供会議の
やっぴやりますグループ
(チームの
意気込みをそのままに)

義農祭の活性化プロジェクト

提案のポイントは、行燈です。珍しい、作成することで多くの人が協働できると考えました。商品開発は、私たち若い世代の目線から、安く甘いものを考え、特産を使ったタルトにしました。

一粒の麦種を守った偉人「義農作兵衛」
一粒の種から花満開の町を



私たちが育てた花の種を、広報まさきを通じて町民の皆さんに配布。各家庭や公園などで育てた後、花をテーマにしたイベントを開催します。イベントでは、写生大会や写真・動画のコンテストなどを行います。

これらを通じて、観光スポットが少ない、行事に華やかさが無い、知名度が低いといった問題が改善できると考えます。

提案は子供会議の
FANKSグループ

楽しく(Fun)
元気で(Active)
自然溢れる(Nature)
輝く(Kira-Kira)
笑顔の町(Smile)



義農作兵衛は一粒の麦種、だから私たちは「一粒の花の種から花満開の町」にしたいと思い、提案しました。自分たちが育てた花の種から、多くの人に花の美しさを知ってもらい、花と楽しんでほしいと思います。